

エッセイ

たかが川柳 されど川柳 (二十一)

上野 一彦

私の島巡り

残り少ない人生、世界踏破は到底無理だとしても、せめて日本くらいは伊能忠敬ではないが自分の足跡を全国に印したい。たしか十五年前、大学を定年で退職したときだった。かねてより念願だった小笠原諸島への旅を計画した。普段はどこへ行くにも家内は付いてくる、いや付き添ってくるので、当然誘ったのだが、文明の在るところがいいだの、ホテルの設備がどうだのと、さんざん渋った。ついには彼女の「いつてらっしゃーい」の言葉を鵜呑みに、四月早々東京から南に約千キロ、片道二五時間の東洋のガラバゴス、小笠原諸島への一人船旅を予約した。

その苦勞に報いるかのように、島に到着してからの四日間は、まさにパラダイスであった。太平洋上、南海の大自然の楽園。父島・母島、妹島や兄島など家族の名前の付いた三〇余りの島々。侵略的外来生物と名高いとかげ、グリーンアノールはともかく、父島東側の山間部には、小笠原にのみに生息する固有の鳥、アカガシラカラスバトを保護する「サンクチュアリ」もある。多くの固有種や希少種のいる島々なのだ。それだけではない。夜、浜辺で寝転んでみる星空は、冬の圧倒的な透明感こそなくとも、夏ゆえの穏やかさとロマンチックで濃密な、まさに降りしきる夜に繰り広げられる一大ページェントでもあった。

小笠原の歴史は、わが国にとって思いのほか古く、一六世紀後半に小笠原何某がこの島々を発見して以来だそうだ。江戸時代の後期には、欧米人とハワイの先住民が住み着き、やがて江戸幕府や明治政府の調査や開拓により明治九年には、国際的に日本の領土として認められたと島の案内所の展示年表に記されていた。

私にとってほとんど予備知識のない小笠原であったが、第二次世界大戦の名残りがそのまま、島のあちこちに今も鮮明に残っている。大戦中、小笠原は沖繩同様、アメリカ軍との戦争の舞台となり、なかでも父島・母島は激しい攻撃を受けたそうだ。当時の日本軍が築いた数多くの防空壕や高角砲(旧海軍の

小笠原には一般向けの空港が無く、飛行機といえは海上自衛隊の飛行艇が使用可能とのこと。あるにはあるがあくまでも防衛用、かつ緊急医療用と聞く。従ってアクセスは東京・竹芝桟橋との間を運航している定期船のみという、まさに太平洋の大海原に浮かぶ離島なのだ。約半世紀間伊豆大島に小さな家があったお蔭で海路を通い慣れている私にとって、伊豆七島への足として馴染みの東海汽船かと思えば、小笠原汽船という初めて聞く船会社所属のやや小ぶりの船であった。想像通り、四月の太平洋はなかなかの強者、船は揺れに揺れほとんどベッドに寝たきりの旅。正直、小笠原は想像以上、いや想像を遥かに超える南海の孤島であった。

呼称で陸軍では高射砲と呼ぶの残骸、島の周りの海中にも艦艇の朽ちた姿も見られた。戦争の傷跡が今もなお、東京都に属する小笠原にこんなにもあるのかと驚かされた。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、できるだけ考えないようにしていた帰る日がたちまちやって来た。島を離れようとする小笠原丸の横を、現地の方々の小舟が何艘となく追いかけてきて名残りを惜しんでくれた。帰路に就く我々に、「また来てください!」という人懐っこい別れの声かけに、一瞬、返事の間が空く程ハードな二五時間の船旅がもう一度待っていた。

こうして念願の、最初で、おそらく最後であろう小笠原の旅は終わったのだが、もう一つ大切なことを学んだ。それは、機嫌良く家内から送り出されたはずの一人旅であったのに、帰宅してみると、何となく、ではなく明らかに不機嫌かつ不穏な空気が漂い、以後、旅行は夫婦ですると約束させられる羽目となった。

話を戻そう。同じ島ではあっても沖繩、特に八重山諸島は直行便でなくても飛行機が使えるので高齢の夫婦旅行には最適である。なかでも石垣島は東京からの移住者も多く、かつて私自身「癒しの島」と呼んだこともある素晴らしい人間味にあふれた島でもある。次男の結婚式も含め、何度も訪れている。

またTVドラマ、ドクターコトの舞台でも知られる与那国等は、最西端に位置し、隣の台湾がすぐそこに見える島として

も知られる。島の周りの海流はやや早い、不思議な「海底遺跡」を訪れたり、生涯最後のダイビングもここで体験した。行つてない島は数えれば数々あるが、最南端の波照間島もその一つであり、なんとか足跡を残したいと思いつつ時が過ぎていく。

こうした沖縄の島々は別格としても、お隣の九州にも屋久島という素晴らしい島がある。林芙美子の小説「浮雲」の終盤に屋久島がでてくる。「一カ月で三五日雨が降る」と言われるほど降水量の多い島だ。島には火山によってできたものも多いが、屋久島は隆起でできた島で、九州最高峰の宮之浦岳を筆頭に、九州地方の高い山の一位から八位までが屋久島にある。こうした地形が、直径三〇キロに満たない島ながら、南北二〇〇キロにおよぶ日本列島の自然が詰め込まれているといわれる。亜熱帯植物から高山植物まで、その垂直分布を見ることが出来る稀有な島なのだ。

縄文杉も有名なのだが、この屋久島への家内の関心を高めるために、屋久杉だけでなく世界自然遺産だの、「もののけ姫」の舞台を思わせる白谷雲水峡トレッキングだの、さらには安心で快適な個人ガイドなど、魅力満載の提案を数々並べ立てた結果、なんとか実現にこぎ着けた。

当初小笠原ほどではないにしても、やや難色を示していた家内も、行ってみればその自然の素晴らしさに大満悦であった。沙布岬、西は与那国島、南は波照間島、北は宗谷岬と言うことになる。これなら夫婦で行くことも可能であるし、すでに到達済みで、残すは波照間島だけというわけで目標は容易に満たされる。

夏には北海道をなんとか訪れ、北の利尻・礼文島には二度、礼文から北の果て宗谷岬までの海路も経験している。東の果ての納沙布岬も二度訪れ、沖縄の日の出とは約二時間のズレという、日本の細長さを実感もした。そして北方領土たる歯舞、色丹のあまりの近さに、住んでいた方々の返還を願う強い気持ちも味わった。そうしたわけでわれら夫婦が未だ訪れたことのない東西南北の果てとしては、南の波照間島を残すのみであり、その気持ちは日に日に強くなった。まあ一つぐらい残しておいた方が余韻というか、余裕というか、よい気もしないではないが、たかだか交通機関を使つていくだけのことではないか。これまでに三度チャレンジしたがまだ到達（大げさな表現で顰蹙ものだが）していない。石垣島まではいくのだが初回は悪天候。二度目は、そこそこの天気だったが、行きはよいが帰りは欠航の恐れがあるとされ諦める羽目となった。一昨年、年明けに三度目の波照間行を入念に計画し、予約も入れ、東西南北の果ての制覇実現が目前のものとなった。

こうし心浮き立つ暮れのある日、仕事納めに二年前に理事長を仰せつかった旭出学園を訪れた。恩師が創設した私立の特別

ガイドさんも地元出身ではなく、屋久島に魅せられてこの地へ来たという屋久島鼻根。沢の水を汲み、彼持参のコツフェルに入れてくれたコーヒーも抜群に美味しかった。

こうした島巡りは、最大の島、佐渡だけでなく、瀬戸内海の芸術の香り高き直島など、島国日本に住めばキリがない。ところで私は、日本一とか、日本三大〇〇といった言葉にも弱い。日本一長い川である信濃川は何度も横切つてはいるのだが、かといって縦にその源流を訪ねる旅などは夢に満ちてはいるが、最後は原生林を彷徨う姿が思い浮び、何やら面倒である。それにくれば日本一高い山、富士登山は手頃である。諺に「富士山に一度も登らぬばかに、二度登るばか」というのがある。

私自身は青年期にすでに経験しているのだが夫婦ではまだない。「二度登るばか」を承知で「二度も登らぬばか」の汚名を濯ぐべく家内を誘うのだが近場なのに全く反応がない。弾丸登山とは真逆のゆったり山登り。日本人なのに、ご来光はもとより、一步も踏み入れてないことを残念だとも思わないようだ。その淡泊さには感心するばかりである。そういうわけで富士山はいつも箱根止まりである。

しからは風見鶏よろしく、日本の東西南北の果てはどうであろうか。これも地図上だと、南鳥島（東端）、与那国島（西端）、沖ノ鳥島（南端）、択捉島（北端）ということになる。

飛行機ならずとも公共の交通機関を利用してとなると、東は納支援学校、公立は全国に千二百程にも増えたが、私立はわずかに二〇足らず、どこの経営も容易ではないようだ。この二年間、月に何度も足を運び、園生や先生方と会い、この学園の将来をどのように考えたらよいのか、私なりにじっくり見てきた。

私にも方向性がなんとか見えて来たので、一度ゆっくり先生方と話してみたいと校長には伝えてあった。そんな私の願いを受け止めてくれた校長から「ふだんは子どもの教育があるのでなかなか時間がとれないが、一月五日なら、授業はまだ始まらないので、二時間、時間がとれる」との突然の温かい言葉だった。早速、スケジュール表を見れば、その日は、三度目の波照間往きの初日。思わず息を飲み込んでしまった。

家内の誕生日を忘れていたり、私の都合でのキャンセルが度重なつていたりしたので即答できず、いったん家に帰つておらずと事情を話した。理事長を引き受けることになった時、「あと一〇年長生きすることにした」との老いの必死の決意を聞いた覚えのある家内、即座に「あなたは皆さんと話をしたいんでしよう」とあつさりOK、後押ししてくれた。「もつべきものはよい妻、よき理解者である」というわけで、私の日本の島巡りと東西南北最果ての旅行は未完のままである。おそらく見果てぬ夢を追い続け、未完成こそがそこはかとなく美しいかもしれない。なんて決して家内の前ではいえないがそういう顛末である。

たかが川柳 されど川柳 (二〇一三年)

一月

令和柳多留第四集二五号

ミサイルを観客席でただ眺め

題詠「内」

主夫の友切れる包丁そばの猫

友の死に慣れていきます高齡者

題詠「マスク」

外せないマスクは顔の羽織です

マスクして目は口よりもよく喋る

題詠「飛ぶ」

ミサイルでウサを晴らすな独裁者

たんぼの綿毛に託す平和です

題詠「青い」

平和ぼけ廃墟の街の青い空

青年の消えし村にも桜咲く

題詠「待望」

わがままにピンピンコロリ許してね

終戦の安堵の気持ち今一度

ばらぼらⅡ 一六号 (通卷三〇号)

正月だ金魚のエサもやや多め

あと少し生きてやるぞと餅を食う

年賀状わざわざ仕舞うことも無し

題詠「誓う」

傷つける嘘はつかぬと嘘をつく

バレるよな浮気なんかは致しません

嘘つけば指輪がきつく締まります

多年草 一六一号

楽しかった 山駆け抜けてこの言葉

ひとの幸喜べるようになりました

片手では数え切れない去りし友

題詠「曲がる」

七重八重その根性は個性です

盆栽は丹誠こめてねじ曲げる

カーブでもバランス保つそれ若さ

二月

ばらぼらⅡ 一七号 (通卷三二号)

年金も勝手に値上げしてみたい

朝モヤに霜柱かとビルの街

グチひとついわず働くルンバです

またやった一日遅いおめでどう

多年草 一六二号

外交はパンダだけなら平和です

卒業式顔うる覚え同級生

さらば友 先にいうのは俺？お前？

題詠「当然」

不機嫌な空気耐えかね白旗だ

嘘をつく嘘をつかせるこの空気

気がつけば死が日常になっていく

四月

ばらぼらⅡ 一九号 (通卷三三三号)

桜咲くあなたに手紙書きましょう

花の咲く花には花の秘めた意図

伝えたい言葉を抱いて石となる

題詠「チャンス」

寒いです二人きりです無言です

意気地なし今がチャンスとベルは鳴る

わが猫にまた逃したとあくびされ

多年草 一六四号

三月

ばらぼらⅡ 一十八号 (通卷三二号)

デパート跡ハチ公だけが見守って

メール仕舞いアドレス削除して合掌

もういいかそう思いつつ内視鏡

題詠「台無し」

真っ白なシャツにカレーのご挨拶

サインして押した印鑑上下遊

コロナ越え侍JAPAN満開だ
子の姿消えた村にも桜咲く
WBC神様だって描けません
題詠「ヒヤヒヤ」
喋らない言い訳しない目を見ない
運転は八〇歳のあの車
嘘はない少し尾ひれを付けただけ

五月

ばらぼらⅡ二〇号(通巻三四号)
だんだんと永遠の別れに強くなる
生き残るたった一人じゃつまらない
やり残しあっちゃならぬと指を折る
題詠「のんびり」
何しよう鬼の居ぬ間のお留守番
山手線時間余って逆回り
余裕です明日できること今日しない

多年草 一六五号

掛けちがうボタンの先に和平なし
大木にそつと耳あて鼓動聴く
AIは物知りだけど情は無し

失敗を重ねて人は丸くなる

七月

ばらぼらⅡ二二(通巻三六号)
ときめきは生きてる証拠永遠に
消し去りたい記憶ばかりがゾンビする
独り身のシーラカンスはゆうゆうと
題詠「こみ」
褒めすぎよ護美と書かれて恐縮す
再生の母と信じて海に捨て
二世たち成り上がってはごみとなる

多年草 一六七号

梅雨の間に枝切る音が小気味よく
朝採りのトマトガブリで梅雨終わる
ロシアではムジナが二匹仲違い
題詠「運」
運だって選びたい人きつという
いつまでも果報待ちすぎ過眠症
運だって選びたくなくなる時もある

八月

題詠「一日」
一日を一生並みに濃く生きる
ご馳走様 次の献立待っている
一日の長 越すに越されぬ壁ですね

六月

ばらぼらⅡ二二号(通巻三五号)
お喋りが黙っていたい時もある
ひっそりと野に咲く花の生き様よ
お別れはアリガトウネの一鼓動
題詠「タイマー」
止まります一秒前にドラマでは
終末のカウントダウン聞こえます
心臓は命のタイム刻さんでる

多年草 一六六号

G7稼いだ点を子が減らす
アクリル板消えてスツキリ飯うまし
AIよ和平の道を書きなさい
題詠「教」
数々の無礼乗り越え人格者
ボーとして煌めく星を数えたい

ばらぼらⅡ二三号(通巻三七号)

暑い日はトカゲとなって身を潜め
夕立が猛暑の街に水を打つ
戦争は軍人たちの出世の場
題詠「家族」
増えたかと思えばいつか減っていく
面倒を見たりかけたり家族です
団欒という字がいつかおぼろげに
題詠「暑中見舞い」
酷暑です息を潜めて慈雨を待つ
向日葵も顔を背ける油照り

多年草 一六八号

神様も人の子なんだこの格差
お見送り次はあなたの視線あり
友愛の一粒の麦また落ちる
題詠「歴史」
真実は敗者と共に埋もれてく
ぜひ知りたい歴史は夜に作られる
石棺の蓋を開けては卑弥呼どこ

九月

ばらぼらⅡ 二四号(通卷三八号)

面倒を見てとは言えぬ時代です

沸騰化やがて地球は蒸発す

迷惑をかけてならぬと墓終い

題詠「骨」

どうせなら綺麗な骨で終わりたい

気骨とはどんな骨かとのぞき見る

焼き尽くし残るチタンにありがとう

ばらぼらⅡ 句会 殿ヶ谷戸公園紅葉亭

題詠「虫」

片隅でそつとひと鳴き世を終える

居どころが見つからなくて右左

多年草 一六九号

酷暑です地球マグマと挟み揚げ

海水温上がり魚は温泉に

代筆で売れぬ小説「危機管理」

題詠「体温」

体温と気温がマジに勝負する

若き血に燃えたスタンド夏終わる

感動が薄れ体温低下する

将棋界ヤマタノオロチ登場す

付き合いのNGリスト増えていく

何だっけ？俺の海馬は晩秋か

題詠「アメリカ」

アメリカで始まり終わる民主主義

ではでとやたら崇拜「デワ神話」

グレートでグレーなアメリカグッドバイ

多年草 一七一号

お互いに神の名のもと弾を撃つ

昴逝く昭和の星がまた一つ

クイズ王秀でた力 ムダ使い

題詠「危ない」

夜散歩職務質問されました

溺れるなギャンブルゴルフ外国車

有事とは忘れた頃にやってくる

一〇月

ばらぼらⅡ 二五号(通卷三九)

一言が万死にあたる「汚染水」

今どきは「めっちゃ」「やばい」でみなすます

風と馬 議員なんでも飯のタネ

題詠「詩」

成就せぬ悲恋失恋の母

ただ怖じけ 汚れちまった悲しみに

目を瞑り一人恋唄口ずさむ

多年草号 一七〇号

補助金も税で払わせ配るだけ

この天候 地球末期の息づかい

拒否権を盾に平和をもて遊ぶ

題詠「ガラス」

靴ズレの心配ないのシンデレラ

無理すればヒビが入るよひとの仲

濡れそぼる窓の向こうの別世界

一二月

ばらぼらⅡ 二六(通卷四〇)号